

# 介護関係者ら疑似体験

## 仮想現実端末使い「幻視」



認知症の人が目にする光景を疑似体験する参加者

# 認知症の苦しさに共感

認知症の人が目に見える光景を仮想現実(VR)端末を使って疑似体験する催しが22日、秋田市の県青少年交流センターで開かれた。介護・医療関係者や学生ら約40人が参加し、ゴーグル型端末に映し出される映像を通して認知症に対する理解を深めた。

能代市などで介護施設を運営するあきた創生マネジメント(阿波野聖一社長)が主催、関東で高齢者住宅の運営など

下河原社長は「認知症の人や家族が生きやすい社会の実現を」と訴えた



認知症が  
認知症の  
生きづら

この日使ったプログラムは、認知症の人が訪問先の友人宅で幻視を目にして戸惑うケースなど3例。参加者がゴーグル型端末とヘッドホンを装着すると、友人宅玄関からリビングに進んでソファに座り、友人らと会話する光景が

を手に掛けるシルバーウッド(本社・千葉県浦安市)の下河原忠道社長(46)が「認知症の人たちが普段どのような光景を目にしてどう感じているかを体感してほしい」とあいさつし、自社開発のプログラムで参加者に認知症を疑似体験してもらった。

映し出された。顔を上下左右に向けてその動きに応じて室内のさまざまな場所の映像を見ることができ、部屋の隅に見知らぬ物が立っていたり、テーブルの上をへびがはい回ったりする幻視の様子も映し出された。プログラムは幻視や幻聴を伴うことが多いレバー小体型認知症の人が監修し、実際の体験を再現したという。

下河原社長は「われわれは風邪の苦しさに共感できて共感できない。認知症になつたことがないからだ。VRを使えばそのギャップを埋めることができる」と説明。「キーの上に虫がいるように見えたら戸惑うのは当然。幻視も乱視や遠視、近視と同じようなものだ」と周囲が受け止めることができれば、認知症の人たちも生きやすい社会になる。認知症イコール人生の終わりではない」と話した。

参加者からは「自分の中の認知症のイメージが変わつた」との声が聞かれた。日赤秋きたが、認知症の方が見てい田看護大学院1年の佐藤友里さん(22)は「認知症の方と接したらいいのか学んで想を口にした。」(松川敦志)



発行所 秋田魁新報社  
〒010-8601  
秋田市山王臨海町1番1号  
©秋田魁新報社 2017年

2017年  
(平成29年)

7月23日  
(日曜日)

☎ 共通局番  
018(888)

読者交流 1818  
社会地域報道部

	1830
政経部	1832
文化部	1829
運動部	1846
制作センター	1802
論説	1820
NIE	1822
販売	1852
総務局	1800
営業局	1862
事業局	1857